



大学を卒業して三十六年、同じ病院で診療を続けています。そのため病院医でありながら開業医のように親、子、孫まで三代に渡って診療をさせて頂くことがあります。

十年ほど前、甲状腺が大きく腫れた二十代後半の女性患者さんが、開業医の紹介状を携え診察に来られました。付き添いの方が、まず口を開かれ「お久しぶりです。おじいちゃんがお世話になりました。孫を連れてきました」という。顔をじっと見つめると二十五年ほど前に、わたしが主治医として治療にあたり、残念にもがんでお亡くなりにな

医師36年、患者と苦楽共有

なった患者さんの奥さんでした。紹介先の私の名前に気づかれ同伴されたとのことでした。

これまで主治医として受け持ちながらも力が足らず亡くなられた多くの患者さんがいます。それでも、その家族が診察に来てくれた時、家族の信頼をつなぎ止めることができましたと、ほっとするものです。振り返ると、同じ病院で長い勤務を続けられた理由は、多くの患者さんやその家族が、わたしの医師としての成長を暖かく見守り応援してくれた事があると実感します。医者として、患者さんや家族と一緒に人生を歩み、楽しい思い出だけでなく苦しい時も共有しよう。そう思っ、今日も外来に向かいます。

(公立南丹病院長 梶田芳弘)

かじた・よしひろ氏 1947年、神戸市生まれ。73年に府立医科大学を卒業後、公立南丹病院で非常勤医。75年から同病院に勤務。96年から現職。専門は腎臓、甲状腺疾患。